

創立100周年 個々人で目指す「Myパーパス」

農林中央金庫は創立100周年を迎えるにあたり、「Myパーパスプロジェクト」を立ち上げました。このプロジェクトは、私たちの掲げる存在意義（パーパス）を役職員のそれぞれが「わがこと」と位置づけ、本来の業務に加えて、農や食、人や環境、地域や社会のためにさまざまな活動をする枠組みです。プロジェクトの一つである「JA援農支援隊」などに積極的に参加している職員4人が取組みと意思を語ります。



コーポレートデザイン部
コーポレートサービスグループ長
国内拠点担当

おたあきひろ
太田明宏

2001年入庫。Myパーパスプロジェクトの企画・運営を担当。JA援農支援隊を導入し、自らも参加して取組みを牽引。

食農法人営業本部
営業第五部

やなせみゆき
柳瀬美幸

1998年入庫。JA援農支援隊最多参加者で、その他プロジェクトにも積極的に関わる。同僚にも参加を呼びかけ中。

富山支店
系統プロモート班

なかだけいすけ
中田圭亮

2009年入庫。プロジェクトの一つであるAgrication&Fincationを主催する傍ら、JA援農支援隊などにも参加。

食農法人営業本部
営業第五部

おおさきゆみ
大崎裕美

2013年入庫。JA援農支援隊最多参加者で、その他プロジェクトにも積極的に関わる。若手職員のリーダー的な存在。

さらに高く跳ぶための踏切板 それがMyパーパスプロジェクト

太田明宏 農林中央金庫は今年度、創立100周年を迎えるわけですが、これを外部に向けて大きくアピールするようなことは考えていません。100周年事業の一つである「Myパーパスプロジェクト」もコンセプトは「未来志向」、そして「インナー向け」です。担当者としてまず気になっているのは、そのインナーである職員がこのプロジェクトをどう受け止めているのかなんですが、皆さんの周りではどうですか？

大崎裕美 農林中金の役職員用ポータルサイト（ポータル）で太田さんたち事務局の方々が日々発信している情報は見ている人が多いですね。部長、副部長が積

極的に周知を図っていることも大きいと思います。

柳瀬美幸 管理職自らが忙しいスケジュールの合間を縫って「JA援農支援隊」[P.20上段参照]に参加している部署もありますからね。「やってみせ、言って聞かせて……」を実践されている感じがします。

中田圭亮 そうやって管理職が前向きだといいですね。

太田 それはなんとも力強いアンバサダーですね。

中田 そもそもプロジェクトの事務局を務める太田さんは、どういう思いで取り組んでいるのでしょうか。

太田 この10年は、農林中金が変わることに取り組んできた10年だったと僕は考えています。資金を運用して得た利益を会員に還元するという今までの役割だけでなく、「地域や環境といった大きな課題にも取り組

む協同組織の“伴走者”でもあるべきだ」と、変わろうとしてきた10年だと思うんです。

そういう「変わりたい」という農林中金の姿勢を言葉に表したのが「存在意義（パーパス）」や「目指す姿」ですよね。そこに示された方向性は時間とともに必ず内部に浸透していくはずですが、「そのスピードをブーストしよう」というのが100周年事業の意図するところであり、職員の自律的な参加を促す枠組みがMyパーパスプロジェクトであると捉えています。

たとえるなら、高い跳び箱を跳ぶとき、助走でスピードを上げて最後にダンッ！と踏む踏切板があるじゃないですか。あの踏切板のような役割を100周年事業やMyパーパスプロジェクトが担いたいわけです。事務局の役割は、役職員に向けて「ほら、ここに踏切板がありますよ、これを使ってもう一段、上に行こうよ！」と、大きな声で呼びかけること。さきほど最初に皆さんに、周囲の受け止め方を聞いたのも、そのためです。

中田 なるほど。

「JA 援農支援隊」への参加で 農・食を支える仕事を再認識

太田 もうひとつ聞きたいことがあります……皆さん、Myパーパスプロジェクトを楽しんでいます？ さきほど自律的にと言いましたが、こうした取組みを広げていくためには、皆さんに面白い、興味深いと感じてもらわないと続かないと思っています。

柳瀬 私と大崎さんはJA 援農支援隊にこれまで何回か参加しています。多くは3泊4日とかで支援先の地域に出張して活動するんですが、毎回、大きな充実感を得て職場に戻ってこられています。

大崎 私たちがまさにそうですが、“リピーター”になっている職員と現地で何度か顔を合わせることがあります(笑)。皆さんも同じように感じているみたいですよ。

柳瀬 3日間の活動だと作業に慣れたところに終わっちゃうんです。なので、「もっとこの地域のこと、生産者のことを知りたい!」と、帰りたくなくなってくるんです。受入先の農業者の方からも「来年もまた絶対来てね」などと言ってくれますし。もう、絶対また行きたくくなりますね。

大崎 わかります。私は地方を転々としながら育ってきて、母が土に触れることが好きだったので、自分自身土に触れるとほっとする感覚があったんですが、最初にネギ収穫の支援に行ってから完全にハマっちゃいました。受け入れていただいた農家さんには本当に感謝しています。

柳瀬 農作業自体は、想像のとおり本当にハードなこ

JA 援農支援隊



役職員が各地の農業法人や農家の
もとで農作業に従事する

JAグループの農協観光が主催する、生産者・産地をサポートする援農ボランティアの派遣制度。農林中金を含むJAグループの役職員や一般企業社員、大学生などが働き手として参加する。農林中金のビジネスパートナー企業が活動に興味を持つケースも増えている。既に合同で活動した実績もあり。

とが多いです。それでも、私は何かを生み出す農業という仕事の素晴らしさに直接従事できることに喜びを感じますし、生産者の皆さんと同じ汗をかきながらお話しできるのが本当に充実感があるんですよ。私たちの仕事は農業と強く結びついています。農業法人の社長さんや従業員の方と直接話ができる機会があるかといえば、少なくとも私にはありません。ほぼ毎回のように、厳しい現実も教わりますが、それでもなぜ農業を始めたのか、続けているのか、その理由をうかがったりすると、自分の仕事について考えさせられるんですよ。

大崎 それなんです! 「農業・暮らし・地域に貢献する」という自分の仕事の意味や重さが、JA 援農支援隊に参加すると少しわかる気がするんです。ここが自分たちのスタート地点なんだと。

中田 農林中金には以前からJA研修というものがあります。新卒で入庫して間もない頃に、各地のJAに赴いてJAの業務を学ぶ体験型の研修なのですが、僕は転職で入庫しているので、その機会がありませんでした。だから、最初にJA 援農支援隊に参加したことが、僕にとってはまさにスタートでしたね。農や食の分野で仕事をしたいというのが転職の理由だったので、JA 援農支援隊で「農業にダイレクトに触れられた!」と強く感じました。

太田 皆さんからアイデアをいただきたいんですが、JA 援農支援隊は5年間でのべ1,000人参加という目標を掲げています、その実績はスタートから現時点(2021年12月~23年6月)までの約1年半で300人です。実はこのうち3割が皆さんのようなリピーターでして、正直なところ、なかなか裾野が広がらない。これを広げるにはどうするのが有効だと思いますか。

柳瀬 まだ行っていないけれど興味はあるという人は私たちの周りにもたくさんいます。行きたくないわけではないんです。足りないのは声をかける人、背中を押す人ではないでしょうか。

参加経験者がいない職場では、誰かが前例をつくる

Agrication & Fincation

農林中金富山支店を含むJAバンク富山が、さまざまな関係団体・企業などと連携して、射水市の片山学園初等科で金融教育を実施する取組み。食育を掛け合わせた体験型授業が特徴的で、これまで、地元ブランド米「富富富」のバケツ栽培、収穫した米での名産「ますのすし」の生産・販売、森永製菓の協力による「キャラメル教室」などを展開している。



「ますのすし」づくりでは米の栽培から包装紙の制作までを体験

ことが大切ですけれど、若手だと一番手にはなりにくいし、声をかける、背中を押すなら中堅以上の職員になりますよね。

太田 奥（和登理事長）さんはよくファーストペンギンの話をされますが、まさにそれですね。

大崎 農林中金で働いているけど、実際の農業や地域の現場を具体的にイメージできている人はむしろ少ないですね。なので、JA援農支援隊は、それを理解するきっかけとしてとてもよいはずです。私は毎度突き動かされるように参加しているのですが、各地域の生産者の皆様からは共通して「郷土愛」を感じるんです。地域を支える存在になっていくには、農業の実態を学ぶことはもちろんですが、そうした郷土愛に接することに意義があると思います。

太田 農林中金自身がパーパスを掲げて、いわばアイデンティティの再定義に取り組んでいる。Myパーパスプロジェクトはまさにその個人版ですからね。

中田 Myパーパスプロジェクトに参加する際に重要なのは、職場のチームワークですよね。自分がプロジェクトに関わっている間、代わりに業務を引き受けてくれる人がいないと……。快く送り出してもらえるの

は、自分がない間がんばってくれるチームメンバーがいるからだと思います。

大崎 私たちの場合、「行ってらっしゃい！」と言って、土産話を待っていてくれる職場なので、ありがたいです。

柳瀬 安心して出かけられるし、反対に自分が送り出す側のときも全力でサポートできますよね。

中田 転職してきてすごいと思ったのは、農林中金は誰かひとりが何か企画すると、応援しようという人が必ず出てくる組織だということなんです。だからこそ、Myパーパスプロジェクトにも本気で取り組める。

農林中金で働く自分だからできた 食農・金融教育によるひとづくり

太田 富山支店での「Agrication & Fincation プロジェクト」[上段参照]も、まさにそういう取組みですよ。中田さん個人の思いがまずあって、その実現に向けて支店内、JAバンク、そしてお取引先へと輪が広がっていく。

中田 ええ、子どもを対象に食農教育、金融教育をやってみたいというのは僕のきわめて個人的な願いでした。転職してから、まずは組織としてやるべきことに全力で取り組んできて、個人として何ができるかということは考えたこともなかったんです。

太田 でも、きっかけができた。

中田 そうです。2年間、本店でJAバンクの資産形成業務を担当したとき、一緒に仕事をさせてもらったのが証券会社から出向でこられた人や運用会社の人、僕と同じ経験者採用で入庫した人など、とても幅広いバックグラウンドをもった人たちでした。まさに多様性のある組織で、そこで侃々諤々の議論をしているうちに、組織にはいろいろな形があって、仕事のやり方も、もっと自由であっていいのではないかと気がつきました。

じゃあ自分は何がやりたいのか。どうしたいのか。そう考えてみると、僕の場合、まず人の役に立ちたい



という気持ちがあって。では農林中金で仕事をしている自分が何をやれば人の役に立てるのかと自問自答した結果が食農教育と金融教育だったんです。人を育てる教育は人の役に立てる分野だし、食農と金融は農林中金が強みを持っている分野ですから。

太田 そこから支店内でプロジェクトを立ち上げて、JAや自治体に協力をお願いして、学校にアプローチして……前例や雛形があるわけではなく、一からすべて作り出さなくてははいけないし、さらにそれを、日常業務も回しながらやっていたんだからすごい。

中田 僕の場合、職場である富山支店のチームワークがすばらしかったんです。相談して最初に返ってきた反応が「いいことだから、やりなよ！」でした。

初めからすべてが順調だったわけではありませんが、自分が人の役に立つためにやりたいと思ったこと——まさにMyパーパスですね——をやれて、しかも仲間が味方でいてくれる。これは素直に楽しいですよ。

大崎 実際、学校での取り組みをポータルで見て「楽しそうだな」と思っていました（笑）。

中田 片山学園さんが興味を持ってくださって、JAや富山県、地元の企業、全国企業の皆さんにも協力していただいて、Agrication & Fincationプロジェクトが形になってきたのは、もちろん大変なことではありましたが、とても楽しいことでもあります。これまでキャラメルを題材にした授業や富山の銘柄米を育てて名物の「ますのすし」をつくる授業などを展開してきました。まだ公表できないのですが、今後もJAや企業、大学などの方々と相談しながら食や農、金融について楽しく学べる授業を考えています。最近では「自分ほど農林中金を楽しんでいる職員はいないんじゃないか」とまで思いますね（笑）。

柳瀬 そう思えるくらい、全力で取り組んでいるということですね。

中田 農林中金の職員はみんな大なり小なり、やりたいことを持っていると思いますが、忙しかったり、「こんなことを言い出しても……」と最初からあきらめて

いたりで、実際に口に出して手を挙げる人はまだ少ないかもしれません。今回のプロジェクトが「自分もやってみよう！」というみんなの第一歩を後押しすることに繋がればいいなと思っています。Myパーパスプロジェクトは、自分がチャンスを与えられていることに気づけるチャンスでもあります。

Myパーパスプロジェクトが生み出す 農林中金内外との多様なシナジーに期待

太田 Myパーパスプロジェクトには、JA援農支援隊やAgrication & Fincationプロジェクトのほかにも「ふるさと共創事業」[P.32参照]など、いろいろな取り組みがあります。「インナー向け」をコンセプトにはしていますが、事業の性質上、農林中金の内部だけでなく外部との連携も不可欠な取り組みばかりです。なので、結果として、過去100年の歴史で農林中金を支えていただいたステークホルダーとの新たな関係性が生まれたり、日常業務とは別のシナジーが生まれているのではと感じます。

私が事務局として最近うれしかったのは、JA援農支援隊に行った人が今度はふるさと共創事業の現地活動に手を挙げるといったケースが出てきていることです。点と点がつながって線になりつつあるなど。農林中金はもともとユニークな組織ですが、そういう人が徐々に増えていくことで、線が太くなり、芯の通ったユニークな強みをもった組織になっていけるのではと期待しています。

Myパーパスプロジェクトは次の100周年に向けて継続していきたいと考えています。入口としてのJA援農支援隊もそうですが、もっと参加者の裾野を拡げて自律的な参加を促して、それぞれのMyパーパスプロジェクトを創り上げてほしいと思います。

中田 僕も続けていきたいですね。

柳瀬 一緒にやりましょう！

大崎 ぜひ！

